

道を作り大山石尊大権現參詣に便するために大山街道か作られて居る。日光の東照宮へと宇都宮から日光鐵道がある。

これら都府の形をいへは交通線に沿うて發達するから自然細長くて街道の方向に走つて居る。而し交通線の交叉する處では兩方の交通線に浴うて發達するからこゝに初めて方形、多角形などになつて裏町を生ずる。東京の近所で其例を挙げれば大森(舊き町の方)は東海道線に従うて居る丈で従つて細長い一筋町である、だけれと八王子に行けば甲州街道と神奈川に行く道とに浴うて居るから格好が違ふ。單に細長い丈でなく巾が廣くなつて居る。而して何れも交通線に沿うて居るといふ事には少しも變りはない。

凡て關東の都府は一般によく平野に分布して居る。これは交通線が幾筋も自由自在に走つて居るためである。そして其交通線なるものは蜘蛛巣狀をなして東京を中心として存在して居るのである。

新山見はる。 尾臺はる。 岡田いし。

●俳諧につきて

文科三年 初鹿野 ども

尾臺はる 岡田いし

こゝに掲げてある通り私は俳諧についてお話致します、元來俳諧はなかなか六ヶ敷いものでとても私どもには解されないのですが近來俳諧は随分歌はれて教科書などにもせてあるにもかゝはらず俳諧がどんな歴史をもつて今のものになつたかといふ事さへ知らぬやうでは如何かと存じまして少し調べた次第であります、併し短時間ではあり又知識のない者の申上げる事で御座いますからほんの上つらを通るばかりだらうと存じますが調べた事だけ其まま申し上げます。

俳諧といふ文字は既に古今集に用ひられて居るので御座います、此時は只滑稽な和歌の稱呼で御座いました、そして近古以來連歌が流行致しましたのでその滑稽のものを俳諧の連歌といひ約して俳諧とも申しましたが只連歌師が時にふれて戯れに作つて見る位の事でした、足利時代の末頃通俗文藝が流行しまして狂歌狂言の様な者が流行しました時俳諧も亦同時代の産物として起つたもので御座います。荒木田守武の「守武千句」山崎宗鑑の「犬筑波」の様なものも此時現はれたのであります、併し畢竟堂上風の和歌や縁語を俗語になほしたり漢語を入れたりするだけで特別な法則は御座いませんでした宗鑑の句に次のがあります。

元日の見るものにせん富士の山

手をついて歌申上ぐる蛙哉

この蛙と歌とを關係をつけましたのは古今集の序から來たもので、古文の意をとつたものと思ひます、それが徳川二代將軍の頃になりました。松永貞徳といふ人が出て始めて一つの法則を設けて近世俳諧の先驅者となつたのであります。

貞徳は細川幽齋や里村紹巴に學んで歌道や連歌道には通じて居り又古文學にも通じて居ましたが元和偃武以後當時文盲であつた人々に連歌の一端をも學ばせやうとして連歌の法則を寛大にし俳諧の法則を作りました、これが弟子によつて全國に傳りまして多くの人に作られ又これに身を委ねて研究する者も出來たので御座います。貞門の七俳仙と申しまして只今まで名の著はれてゐる人もあつた、中でも北村季吟、松江維門、雛屋立圃、安原貞室は殊に長じて居ました、皆様の御存知の

これはこれはとばかり花の吉野山
涼しさのかたまりなれや秋の月
といふのは貞室の句で御座います。吉野山の美をよく現はして居ます、此外六つ選んだものですが

皆人の晝寝の様や秋の月

といふ句も秋を歌つたもので面白う存せられます、貞徳の句としては次の如きが御座います。

雪月花一度に見する卯木哉

けれども此時代の俳諧は内容形式共文藝上の價値はありませんで只形式は徒らに俗語や漢語を入れて言語の洒落を多く用ひたに過ぎません、けれどもこれが和歌の端緒であると信せられて居ましたから「百人一首」や「三代集」や「徒然草」等を研究しまして一面和學者を出し又二面中流以下にも文學を流布する様になりました、最も和學者として名高き北村季吟の如きも其の一人で御座います、この貞門の俳諧は寛永から寛文迄盛でござりましたが延寶天保の頃になりました。談林の俳諧が盛になりました、これを稱へ始めましたのは西山宗因で御座います、宗因は天滿の連歌師で御座いました。貞門の俳諧が歌道初歩だと申しまして一定の規則のありますのを窮屈だと批難して唯茶前酒後の戯として別に難くるしい規則を設けませんでしたから此主張が大變人氣に投じまして後には京都に迄行はれました、井原西鶴、一時軒惟中、小西來山、椎本才麿など此派の人であります、併し貞徳は題材も書物に得たものが多かつたものですから稍上品で御座いました。が談林の方は古文に通せずともよく且つ複雑な方式を暗記する必要もありませんでした。から誰でも少し俳才のあるものは作り得るもので御座います、それで自然作る人も賤しくなり題材も野卑で貞門時代の花鳥風月の風雅よりも市井塵俗の人事を歌ふ様になりました、そして又形式より云ふも放埒な字餘りの句を作りました。

お静かに御座れ夕陽未だ残んの雪

鮎どもが銀の天井張つたと思ふらん水かな

郭公いかに鬼神もたしかにきけ
字餘りでない句には

白露や無分別なるおき處

長持に春かくれゆく更衣

里人の渡り候か橋の霜

一体談林の句は至つて野卑で御座いましたが徒らに古人糟粕を嘗めずかく活世界に着眼するといふ傾向は宗因隨一の高弟井原西鶴をして浮世草紙を作らしむる原因となりました、併し此放埒な句は遂に蕉風のために壓倒せられて貞享元祿の交には全く衰滅に歸しましたので御座います。

これ迄の俳壇を考へて見ますのに貞門は古學者を出し談林は浮世草紙の作者を生みました共に副産物としては立派なものも御座いますが俳諧其ものはまだ立派な文藝とはいはれなかつたので蕉が風出るに及んで初めて詩歌に對立すべき俳諧は大成せられたのであります。形式の上からいふ此頃からは附句なしに十七字といふものか獨立するやうになりました。

松尾芭蕉は初め貞門の季吟について學んで居りましたが後談林について學びました、延寶の頃山口素堂と共に江戸に新派を起しまして從來の粗雑な俳諧をさけて正風を稱する一種の流派を立てま

したけれども始めは老莊を愛讀して居ましたから作物にも寓意のあるものを作つて居りました例へば、

橙を蜜柑と金柑の笑つて曰く

の様なので御座います、併し後に杜詩や「山家集」を愛讀するやうになりました閑寂な自然の間に深い趣味を見とめて閑寂な景を歌つたものが多う御座います。

古池や蛙飛び込む水の音

と云ふのは此頃の俳風の代表といふべきもので御座いませう、芭蕉は其題材も修辭も今迄の俳諧とは大に異つた處があります談林風の花やかなものでなく貞門の歌道風のものでもなく従つて閑寂なそして稍風雅に傾いて居ます、其修辭も野卑でなく高尚に且趣味のある言葉を以てよく自然の閑寂な景や壯大な景や人情と自然とを融和させたものなどを作りました。

うきわれを淋しがらせよかかんこ鳥

其時の有様を鳥によつて現はしたものといつてよいでせう。

荒海や佐渡に横たふ天の川

の如きは實に天地の壯觀を短い句の中に歌つたもので御座います。

住つかぬ旅の心や置炬燵

初時雨猿も小蓑をほしげなり

此寺は庭一杯の芭蕉哉

やがて死ぬけしきは見えす蟬のこゑ

道傍の木槿は馬に喰はれけり

山里は万歳おそし梅の花

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

といった様なものが多う御座いまして滑稽な分子は至つて少う御座いました。

次に芭蕉は俳諧に付いてごんな見地を持つて居たかといふと貞門は歌道の端緒也といひ談林は一場の遊戯として居た、それと異つて俳諧は至つて風雅な道で利慾を離れ禽獸夷狄の境を脱して高尚な道であると申して居ました、そして芭蕉は一蓑一笠で漂泊して天然の趣味以外に何物も求め様としなかつたのであります。それで此俳諧は忽ちにして全国に行き渡つたのあります。此時西山宗因の門下松江維舟に就いて學んだ人に平泉鬼貫といふ人がありまして古風を捨て、單に言葉の上の滑稽の外に誠あるべしといひまして巧を弄せずして至つて平淡の趣味を得ました次の句でよく分ります

骸骨の上をよそうて花見哉

行水のすて處なし虫のこゑ

庭前に白く咲きたる椿哉

これは蕉風と並んで伊丹風と稱せられましたが蕉風の活眼には及ばず壓倒されました。

此様に蕉風は寛文時代に勢力を得まして門人二千人近くありました其内十哲と稱せらるゝ其角、

嵐雪、去來、丈艸、支考、許六、野坡、越人、杉風、北枝は殊に勝れて居ました。

中にも其角嵐雪は最も勝れて居まして其角は豪放嵐雪は繊細な名句を作つて居ます。

其角の句に

雪の日や船頭殿の顔の色

鶯の身をさかさまに初音かな

夜着を着て歩いて見たり土用干

聲かれて猿の齒白し峰の月

大原女紅葉で叩く鹿の尻

明月や壘の上に松の影

いさ行かん雪見にころぶ處まで

紅葉には誰か教へけん酒の爛

嵐雪の句に

元日や晴れて雀の物語り
蒲團着て寝たる姿や東山
黄菊白菊其外の名はなくもかな
秋風の心動きぬ繩すだれ

其外去來は芭蕉の句を最よくまねて居ます面白いのが澤山あります

いそがはし沖の時雨の眞帆片帆
何事ぞ花見る人の長刀
夜嵐や空に吹きとる鹿の聲

許六の句には

清水の上から出たり秋の月
大佛や横穴あけて土用干
初雪やまづ馬屋から消え初める
出代りや静の宿へ武藏坊

支考のは

鶯の肝つぶしたる餘寒かな

此外文章のは

牛叱るこゑに鳴立つ夕かな
黒みけり沖の時雨のゆく處
鷹の目の枯野に据る嵐哉
夕立に走り下るや竹の蟻

野坡のは

苗代や二王の様な足の跡
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴

面白い句は澤山まだあります、之等の弟子は俳論にも長じて居りましたものがたくさんあります、たので芭蕉の死後は之等の人が互に一派を起しまして門派の争ひが起る様になりました。

其角の江戸座、嵐雪の雪門、素堂の葛飾風、去來の落柿舎、支考の美濃風、涼菟の伊勢風等の内江戸に於ては豪放な其角の調子か最も歡ばれ上方では美濃、伊勢の輕妙な調子が行はれて居りました併し此時に至つて蕉風は全く墮落しこれは信屈難解を以て高しとし彼は俗談平易を以て輕しとする様になりました。

此間に其角の徒や沾徳が一時戯れに作つた洒落風と稱する様な謎の如き俳諧や沾洲の比喻体やら

種々異様の風が起つて享保前後の俳諧は一時全く俗了せられました。そして次の雑俳の時期を來しました。洒落風が流行したと共に上方に行はれて居た前句附が江戸に行はれました。其外川柳、五文字、笠附、地口、語呂の様なすべて滑稽なものか盛んでした。元來元文から天明迄は江戸趣味の輕妙なものか多く黄表紙洒落本狂歌のやうなものか現れ雜俳も此時代には特殊の趣味を持つものかあらはれました。蜀山人宿屋飯盛等が其主唱者であります。斯くの如き俳壇は安永天明になりまして所謂蕉風復興の氣運が起りました。先づ先蹤者としてあげてよいのは與謝蕪村と大島蓼太とであります。最先鋒者としてあげるべきは横井也有と炭太祇とで御座います。この二人は上品な滑稽に長じてゐて滑稽流行時代と天明調との連鎖とも見るべて人であります。

也有は美濃風の俳人で其俳文は古今獨歩と稱せられてゐます。西鶴、支考、許六の俳文も也有に至つて圓熟しました。也有は博學な人でありましたから滑稽も至つて上品で風雅なものか卑近で通俗のものとの間輕妙な滑稽を描き出しましてかの「鶉衣」のやうな面白いものを作りまして句としてはあまり現はれて居ませんが次の様なのがあります。

化物の正体見たり 枯尾花

木に於て見たより 多き落葉哉

炭太祇は矢張り滑稽な趣味に富んだ川柳を上品にした様な句か多うございす、畢竟江戸風の雜俳

の風をうけて高雅な蕪村調に移る過渡に立つた人ておざいます。

めでたきも女は 髪の暑さかな

飛石にとかげの 光る暑さかな

盗人に鐘つく 寺や冬木立

山吹や葉に花に 葉に花に葉に

御供して歩かせ 申す潮干かな

犬を打つ石の さてなし冬の月

次に其の先蹤者の蕪村について申しますと、蕪村は大体から云へば頗る高雅な艶麗な調を作りました。元來畫に長じて居ましたので色彩の花やかな景色をうたつたものが多く且その直接の見聞よりも讀書の間に得た空想をこらへて工夫を凝して居りましたから自ら漢詩や中古文藝の面影に似通つたものが多く古の俳人の内で蕪村が最も重んじて居りましたのは其角、嵐雪、素堂、鬼貫で閑寂な芭蕉とは稍其趣を異にして居りました。蕪村の句には次の様なのがあります。

鶯や小太刀佩いたる 身のひねり

閣に座して遠く蛙を 聞く夜哉

伽羅くさき人の かりねや朧月

指貫を足でぬぐ夜や朧月
公達に狐化けたり春の宵
衣更金覆輪の鞍置かん
簀虫はちともなくを蝸牛
短夜や浪打ちぎはの拾簿
夕風や水青鷺の脛をうつ
朝霧や晝にかく夢の人通り
一行の雁や端山に月を印す
井のもとへ薄刃を落す寒さかな

蓼太は其俳諧よりも俳諧の修辭を説く事に成功した人で御座います従つて盛名に對してふさはしからぬ駄句も御座います。

世の中は三日見ぬまの櫻かな
五月雨やある夜ひそかに松の月
碎けては三千丈や瀧の月

併しともかくも蕪村蓼太は天明の俳諧復興に對する有力者でありました此二人に續いて蘭更、曉

台、橋良、白雄といふ人が出まして天明の盛期を作つたので御座います而して其大体の調子はすべて蕪村に近い花やかなもので中にも蘭更、白雄は綺麗繊細なる調子に長じて居りました。

人戀し火ともし頃を櫻ちる
衣更今日は身細き太刀佩かん

蘭更の句としては
枯蘆の日に日に折れて流れけり

鳥打や法三章の札の下
冷飯に秋立つ獨住居哉

などいふのがございます此の天明の盛の時を過ぎまして寛政以後にもなほ天明の遺響を存して居ましたが之に次ぎまして蘭更の門下の蒼虬、梅室の如きものかもて囃されました俗悪な天保調となりました併しこの情落した間にもなほ傳ふべき俳人も皆無ではありません。蓼太を始として洒落滑稽に遊んだ安井大江丸定まつた師につかず而も諧謔に長して居た小林一茶等がそれで御座います。

大江丸は富豪の家に生れ六十餘才まで家業に勵精してあらゆる俳人と交際しましたがその作物は何人の足跡をも逐はない上品で滑稽で泰平の象を示している處は頗る也有の俳文に類して居りま

す。人の風情を、吉田屋の蚊に喰はれけり伊左衛門
大正式 吉田屋の蚊に喰はれけり伊左衛門
寒月やか。らりと捨つる殻卵
などその作でございませう。

一茶の方は之と反對に終生貧苦と闘つて居た人であらうから何物に對しても冷嘲の口吻を漏して居ます、併し熱心な念佛宗の信者であらうから且つ世人が總て己に冷酷でありましたから自分より弱い者即ち子供や禽獸蟲魚などには溢るるばかりの同情を有して居りました、其句は時に野卑なものも無いでもありませんが其の輕妙な滑稽は三百年の俳諧史上匹儔がないと云つてもよいのでございませう、その句を一二擧げてみますと

瘦蛙負けるな一茶これにあり

春雨や猫に踊を教へる子

罷出たるは此藪の暮にて候

鳴く猫に赤ん目をして手鞠かな

以上のような滑稽なものが御座います。

そうではありませんが天保の俗調は俳諧を全く惰落せしめ祖翁の精神は蕩然として空しく宗匠商賈の輩さへ此の何たるを知らず唯點に拘泥して雙六などと同様な消閑の遊藝となつたのでございませう。

而して明治となるや泰西の文學は我に入りて詩人文士は一として泰西文學を味はざるなく、その玩味の結果本邦文學も革新せられました、それでその革新に従事せられたものは模範を泰西に存する者即ち我と泰西とに共存する者の種類であります、例へば逍遙の小説を改革せる脚本に手を下せる新體詩をして従來の和歌に代へんとしたる等皆革新思想に基き着々改革せられつつあります、然るに俳諧は西洋諸國にその例がありません、而して彼等革新家は短小取るに足らないものとし又俳句そのものにも彼等の手を下すべからざる性質のものがありました。

考へて見ますれば俳句は世界最小の詩形でその含む意味とその現す趣味とは全く獨特の者であります勿論用語は平易であります、吟詠の對象も卑近でありまして平民文學の名空しくないといへ天保頃の俗調はいさ知らず非文學的の駄句を除きて眞に文學と稱するに足る佳作をとれば十七文字の小篇によく深大の意味を含んで居り寸鐵人を殺す趣があります、且其の着想詩材の配合詩想表現に於て他の文學と特殊なものがありません、殊に全体に趣味に於ては俳句獨特で泰西の如何なる文學者もこれを解する事は出来ません故に明治の革新家がその思想の泰西より得たものをしてどうして

これが解せられませう、或は句を解して意を誤り或は意を解して趣を失ひましたのでございます是れ全く純日本文學でとても西洋美學の則を以て律する事が出来ないからでございます、それでございますから俳諧の革新は明治二十年頃の新思想の文學者に望む可からざると共に又到底蕉門の俗俳を主とする徒に望む事が出来なかつたのであります。

茲に果然革新の曉鐘は夙に泰西文學思潮に浴し而も本邦文學の研鑽をして俳諧固有の趣味を解し且舊俗以外に立ちて其門に入らなかつた新俳人が出ました、之は正岡子規と尾崎紅葉とでございます、此の二人は何等の交通もなく或は談林にとり或は蕉風をとり或は蕪翁を取り其の宗とする所こそ差あれ共に標準を過去に取つて現代の非文學的傾向を打破して之を文學の地位に進むるに付とめた事については一致して居つたのであります、併し紅葉は小説の手をやめて之に従事すべき人ではありませんでした故、即ちその派談林派を復興し普く傳播する事に至りませずしてやみ蕉風復活の子規が革新の主力として現れたのであります、而して子規は蕉風を研究して或はその句を批評し集中の名句を出して芭蕉の眞想を發揮しこれを公に致しました。なほ進んで安永天明の中興俳傑に及んで蕪村に至りてその豊麗なる趣味を解するに至りましたのであります、かくて大に蕪村の俳壇に於ける價値を世に公にし其の句集などを出し新聞雜誌に投稿して大に俳壇を賑はし世に俳味を鼓吹しましたここに於て大に俳諧に趣味をもつ人も出ました即ち碧梧桐の如き鳴雪の如きにて大に俳諧

の復興に力を盡しホトトギスの如き俳文の雜誌も出て俳書俳誌の發刊盛に新聞雜誌も競つて俳句を載せるやうになつたのでございます。

かかる間に俳句の内容に於ても尠からざる進歩をなしその詩形に於ても前の簡單に比して複雑に粗笨より精緻に散漫より緊密に天明より更に進みて特色ある一分子を含むに至りました。

子規は最早や物故しました彼は多方面の文學に志して居りましたが其事業の最赫灼たるは俳句の復興であります彼は俳句の情落を深淵より救うて文學の境域に引揚げまして詩歌の何たるを解せざる非文學者の輩に弄ばれた俳句を學識ある文學者趣味卓越せる詩人の手に移らしめました、この點に於て頗る小説に界於ける逍遙や紅葉の事業に類して居ます。

芭蕉翁の後百年にしてその遺業を興したものは蕪村で蕪村の後百年にして俳句を暗黒中より救つたものは子規であります、而も蕪村の様に孤獨にあらず多くの弟子をして其の才を盡さしめたのは蕉翁にも比すべきであります。

以上申上げました様に俳句は斯様な沿革を経て今回に至つたのであります。

猶今一つこの俳句が女性とどの様な關係があるかを一寸一言附言いたします。

考へて見ますと徳川時代の文學の特徴は凡て平民文學で座います、即ち近松流の戯曲、馬琴風の小説の類であります而して其の内俳句のみは獨り婦人にも歌はれて居りまして随分聞えた人がありま

す即ち加賀の千代女江戸の秋色女をはじめとしてその他園女、智月尼、捨女、梶子等澤山ござい
す而して是等の人々は或は菓子屋の娘であり或は茶店の女であり農家に人となつたのであります、
併し彼等は人の妻として舅夫に仕へ子女を養育し家を整へ多忙なる家穡を営みながらも事にあたり
折にふれてその感想を十七文字に現はして思ひをやつたのであります。

そして其の句は流石女だけに至つてこまやかな優しい情を發露したものが多うございます、千代
女の句としては

朝顔やつるべとられて貰ひ水

夫を失ひました時

起きてみつねてみつ蚊帳の廣さ哉

子供を失ひました時に

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら

凡てこれ等の句は男の俳人には迎も見られない優しい情があらはれて居ます。

智月尼の句としては

鶯に手もとやすめん流しもと

麥藁の家してやらん雨蛙

秋色の句としては

井の端の櫻あふなし酒の酔

憂き事になれて雪間の嫁菜かな

あまたれに袖も菖蒲の句哉

(端午節句に)

園女の句としては

負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉

山松のあはひくゝや花の雲

以上の句をみますとみな何れも如何にも女らしい性質をよく表して居ます、即ち緻密で愛情深き
もので其の句も亦自ら優美で艶麗で一種言ふべからざる情趣がありまして讀者の同情を表せしめ心
を惹くことは男子の句に遙かに勝つて居るのであります。

